

東海大学日文系「專題研究」私見

北川修一

0. はじめに

本学日本語言文化学系では、2006年度入学(4年で卒業すれば2010年度卒業)の学生から「專題研究」が必修科目に加えられた。既に2010年度、2011年度と2期の学生が「專題研究」を履修し、3期目の学生が履修中であり、来年の2013年度、正式に履修する学生も現在3学年時に準備に入っていることになっている(但し第3学年には個人指導を想定した科目は設けられていない)。

「專題研究」とは、卒業制作するための授業で、様々な授業を履修した上で、学生が自らの興味によって行う集大成としての位置づけであり、単一の授業内において学生にレポートとして提出させるものとは性質が異なる。また「專題研究」には学術的研究やその他さまざまな形式の作品が含まれており、作品の場合には、五千字以上のレポートを付すことになっている。以下、拙稿では東海大学日文系での実施であるため、中国語表記の「專題研究」と称するが、卒業作品、卒業論文などに類するものであると考えていただいていいと思う。

卒業論文の提出は日本では一般的であるが、現在、台湾ではこれを採用している大学は必ずしも多くない(前述のように各授業の学期末の宿題は除く)。本学系でも「專題研究」の導入の是非については、学系のそれぞれの教師がそれぞれの意見を持ち、長い議論を経て結局導入することになった。

当初、導入に関する議論に当たっては必ずしも実施に全面的に賛成ではなく、筆者は条件付の賛成であった(後述の「2. 使用言語」を参照)が、実施してみると、筆者が個人的に担当した学生について言えば、多くはある程度積極的に取り込んでくれたと感じている。特に2年目は作品を選ぶ学生が多く、かなり自由な発想で面白いものを作ってくれたと思う。

何事につけても完璧なものはないと承知しつつ、「専題研究」の制度、しくみとして、あえて問題と筆者が思うことも含めて指摘し、今後の改善に繋げていきたい。以下、「専題研究」を実施する意義がどこにあるかを、ここ2年の経験をもとに述べてみたい。

1. 何を求めるか

「専題研究」という、これまでになかった科目を導入するのであれば、そこにどのようなものを求めるかという目的の位置づけが必要であろう。「専題研究」の重要な柱の一つである、学術論文という形態であれば、筆者としては、一応の基準がある。大学で学生が書くものとしては、レポートがあるが、このレポートも学生のなんらかの考えを書くものであろう。ただレポートがその授業を聞いて学び取ったこと、あるいは出された課題について自ら調べ上げたことをまとめればいいのに対して、論文であれば、どんなに小さくても、それ以前の人が提出していないなんらかの新しい知見を出さなければならない。新しい知見には、これまでの説を覆すような大きなものから、これまでの説を支持する新しい資料であったり、新しい見方、考え方など付随的なものまで含まれる。また新しい知見のつもりであっても、考えを煮詰めていくにしたがって、必ずしもそうではなかったことに気づき、最終的には必ずしも「新しい」ものは出ないかもしれないが、少なくとも最初の問題設定の時点ではそのような見込みが必要である。もし「新しい」ものが出ない場合、教師(研究者)の場合であれば、そのテーマは廃棄するなり、そこからさらに別の新しいものを見つけることが必要になるだろうが、学生にはそれを繰り返す時間は、恐らくは多くない。その場合、当初「新しい」と見込んだものが、どのような理由で崩れたのかという過程を記述することで、一つの仮説が成り立たないということを証明する「新しい」ものに、本来はなりうるはずである。

ただし、論文というものにはじめてチャレンジする学生に、上記のようなレポートと論文の違いを話しても、実感として現実的に自分にどこまでできるかを把握できる学生は多くないが、という但し書きをつけておく必要もある。

一方、作品の場合、基準が明確ではなく、また学生も論文は難しいが、作品は容易であると考え、甚だしきに至っては作品はただ作りさえすればいいという印象さえ持っているような雰囲気すら感じられる。

しかし筆者の考えでは、作品であっても論文と同じく、「新しい」部分が必要である。ここでは、筆者が担当した学生で比較的多く選ばれた、台湾の地域を紹介するガイドブックの作成を例に述べておきたい。

筆者から「新しい」ものを要求した上で学生の動機を聞くと、大抵は「日本語で書かれた台湾のガイドブックはほとんど北部が中心ですが、私の故郷、台中にも面白いところはたくさんあります。ですが、台中を中心に紹介した日本語のガイドブックはありません。ですから台中のガイドブックを作りたいです」というような答えが返ってくる。確かに、台中の日本語ガイドブックがないという状況で、それを作れば、「新しい」ものには違いはないが、実際この段階で学生が、現在市販されている台湾の日本語のガイドブックで台中がどのように紹介されているか、またインターネットではどのような情報が得られるか、或いは台湾の観光局、地方政府が出している日本語の資料ではどのように紹介されているかを調べた上で述べた動機ではないことが多い。論文を書くときに必要な先行研究の調査を、作品に置き換えた場合、どの程度紹介されているか、どのような需要があるかなどの調査とも言えるようなものが必須であろう(ただし、上記のソースの中ではほとんど言及されない田舎町は、需要がないからこれをテーマに選んではいけないということではない。後述)。

どの程度紹介されているか、どのような需要があるかなど現状を把握すれば、あとは自由に材料を集め、箇条書的に項目を埋めていけばいいかというと、これだけでは作品としての体をなさないと、個人的には考える。

たとえば、台湾では台北を除けば、台湾第二の都市高雄に隣接することもあり、台湾旅行者の中では、台南は知名度の高いところであろう。その最大の売りは「古都」或いは「歴史の街」ということである。確かに台南は、最も早く漢人が入植した地域の一つであり、鄭成功の反清復明の拠点であり、さらに清朝には台湾の中心であった歴史があり、台湾が経てきた様々な時代を反映する建物が現存する。しかし、特に交通に頭を悩ませなくてもいい台南中心地を散策して感じられるのは、これは筆者の非常に主観的な印象ではあるが、北部にも中部にもある「老街(古い町並み)」のようなもの、その規模がやや大きく見どころもやや集中している程度、である。歴史的文献を繙かなければ、台南は必ずしもすべての人が「歴史の街」と感じるわけではなく、歴史的な事実と、現存する建物を根拠にして、「歴史の街」というコンセプトを与えてこそ「歴史の街」なのである。

これは筆者が個人的に台南は平凡な街であると言っているのではなく(実際には好きな街の一つで、今も「台湾三十三観音巡り」の中の台南の寺院に参拝する計画を立てている。ちなみに台中、高雄、屏東の寺院は参拝を終えている。)、観光というものには、その魅力を伝えるためのコンセプトが必要で、その強さに差はあるものの、どの観光地にもそれはあるはずである。

学生が自分の郷里を紹介するガイドブックを作成する場合にも、そのような魅力を伝えるコンセプトを設定して、それに中心に据えて作成する必要がある。たとえば自分の郷里が、ガイドブックに載るようなメジャーな観光地ではなくても、ここに来れば、日本或いは台北では体験できない何かがあるということを、自ら見出してコンセプトとすれば、十分に「新しい」ものであると認めることができると思う。先に需要の把握が必要であると述べたが、需要がない場合にはそれを作る必要がないのではなく、現状では需要がないことを把握したうえで、その掘り起しを目指すことが必要なのである。

このような要求があっても、論文と択一することのできる作品としての要件を満たすと考える。

2. 使用言語

拙稿「0. はじめに」において、当初、「専題研究」の導入に関する議論に当たって、拙稿筆者は条件付の賛成であったと述べたが、その条件の一つは使用する言語についてである。

作品の場合については、使用言語は特に限定されていないが、目的によって変わってくるであろう。台湾のことを日本語使用者に伝えたいと思うのであれば、当然日本語を使用することになるであろうし、日本のことを台湾の受容者に伝えたいのであれば、中国語の選択も可能になってくるであろう。

ここでは主に論文を選んだ場合について述べておくが、筆者は中国語での執筆を認めるべきであると考えている。

「専題研究」実施後の実情を述べておくと、初年度は論文、或いは作品に付される五千字以上のレポートは中国語、日本語の併記が要求された。次年度には日本語のみの執筆でいいということになった。

筆者は使用言語は論文執筆に当たっては中国語単独でも認めるべきであると考えているが、それは前節で述べたように、「專題研究」では当然「新しい」ものを追及するべきであり、その「新しい」ものというのは、特に論文の場合、その材料さえ羅列すれば誰もが一目瞭然にできるものではなく、自分が理解する今までの考え方はこうであったが、自分の考え方はそれとはどこがちがい、こういうものである、という非常に微妙なものをプレゼンテーションしなければならないと考えるからである。たとえば言語的(文法的、語彙的)な問題を扱った場合、なんらかの微妙な違いを外国語で表現しようとすることは、3、4 年外国語を学んだ学生にとっても要求できるようなものではないと考える。筆者は自分が言語を専攻するので、その難しさを実感して言語の例を出したが、ほかの分野でもこの手の問題は生じるはずである。

「新しい」ことを十分にプレゼンテーションする(そのためには中国語の使用を認める)ことと、日本語の運用を目的とすること(その場合「新しい」ことのプレゼンテーションが十分にできないという可能性もある)、という二つの大きな目的があるとすれば、これがレポートではなく、「專題研究」であるのなら、筆者は言うまでもなく、前者を優先するべきであると考えている。

「專題研究」導入に当たっての筆者の考えは上記のようなものであり、今でも基本的にこれは変わっていない。しかし現状では使用言語はあまり大きな問題になっていない。学生の中には一部、日常生活の基本的な描写もままならないものもあり、それは例外と考えるが、筆者が平均的な4年生の日本語能力を持っていると感じる学生の中で、微妙な「新しい」ことをプレゼンテーションしなければならないところまで、思考が到達している学生が現れていないからである。これには二つのケースがあり、当代の新しいものを対象にしているため、それに関する先行研究がなく、紹介とアンケート調査と感想などを述べれば、形になる場合(ただし本来は方本論、或いは関連分野で、何らかの研究史を設定することは可能であり、それがあってこそ、研究における自分の位置づけが認識できるはずであり、またそのような行為を行わなければ論文のプレゼンテーションの仕方も学びえないはずであるが)と、先行研究はある程度あるが、中国語で書こうが、日本語で書こうが、結局「新しい」ことは見つけなかった場合である。

このような状態で、「專題研究」を導入してから、すでに 2 期の学生が卒業しており、筆者が担当した学生の中にも漠然と「面白い」と感じる作品は少なからずあったが、今改めて「專題研究」とは何かを自分なりに考え直してみたとき、この時代に、必ずしも「專題研究」が必須ではないと考えられている台湾で、敢て導入した意義はどこにあるのかという不安はよぎる。しかし

「新しい」ことを見つけられるかどうかは、ある意味結果に過ぎず、それに向かって努力すれば、それはそれで有意義なのかもしれない。

私の日本語はこんなに上手なのに、私が考えていることは複雑すぎて、今のところでは中国語でしか言えません(実際は母語で言うのも大変な場合も多いだろうが)、どうしたらいいでしょう、というような学生が現れることを期待している。

3. 口頭発表

筆者の理解では、学生の成果を共有するために、またそのレベルの維持のためにも、指導学生と担当教師という限られた場において審査するのではなく、他者の判断を入れるため、また「専題研究」が集大成の位置づけであるため、日常会話や教師に相談する場面だけではなく、口頭発表という正式な場にもチャレンジしてほしいという意図によって、「専題研究」実施の2期目から口頭発表を実施している。

論文或いは作品が完成に近づく、当然のことながら学生は口頭発表で何を述べるかを気にし始める。これまでに述べてきたことの繰り返しになるが、論文の発表が当然、「新しい」知見を述べることにあるとすれば、作品の発表もそれに準じ、自分が考える自分の作品の「新しい」ものを述べるところにある。

例えば「1. 何を求めるか」で例として挙げた、旅行のガイドブックを製作した場合、もちろん幾つかの観光地を紹介することは許されようが、全ての時間をそれに使ったとすれば、たとえそれを聞いてその地を訪れてみたいと思う人が現れたとしても、それに「専題研究」として何らかの価値を見出すことはできない。もし口頭で観光地を紹介するだけの活動をしたいのであれば、書面のガイドブックと組み合わせる形で旅行案内の会を別に自ら主催し、「専題研究」の口頭発表では、その作品や旅行案内の会での聴衆の反応に対する自らの分析を述べるべきである。単なる観光地の紹介、単なる自分の経験、何の裏づけもない感想のみでは「専題研究」では必要ない。

4. 評価の基準

最後に、どのように点数をつけるか、という問題にも言及しておきたい。

再三述べるように、自分が勉強したことをまとめただけ、或いはただたんに経験や感想を述べただけでは、「専題研究」ではありえない。すくなくとも、最初からそれでよしとするべきではない。また、漠然とした印象で面白い、面白くないということ(もちろん、笑いの意味ではなく、興味深いという意味においてである)はたいして問題にするべきではない。「専題研究」実施の最初の数年は、目新しいために面白いと感じるものも、或いは5年目、10年目であれば、教師の目には千篇一律に映るかもしれない。「専題研究」を課するのであれば、何かしらそれがどんなに小さいものであろうとも「新しい」ものを追及し、またその「新しい」ものの所在を読者、受け取り手に委ねるのではなく、学生自らがそれを意識し理解し、さらに言葉でプレゼンテーションすること、或いはその目標に向かうことが「専題研究」の目的であり、意義であろうと、筆者個人は考える。面白いということが重要であったとしても、それは学生が意図して作り上げ、その面白さの「新しい」ところを、意識的に表すことができこそ意義がある。意図の外で、偶然副産物的に生まれたものは当然評価の中心にはなりえず、「新しい」面白さを、自ら作り上げようとしたとしても、その面白さのどこが他と違い、何が面白いと感じさせるかを意識しなければ、その「専題研究」の価値は半減する。

それを述べるのが作品の場合五千字以上のレポートである。五千字以上のレポートに書かれたコンセプトや「新しい」と思っていることが、作品の中でどれだけ具体化されているかという、作品とレポートの距離が評価の材料になるのである。こうすれば、例えば前述のガイドブックなどの場合、もともと見るところが多く人気のあるところが、観光地としてはあまり知られておらず人気がないところよりも圧倒的に書きやすく有利であるということはないか。逆に、もともと見るところが多く人気のあるところをテーマとした場合、既存のものに依存し、「新しい」ものを見つけ出すことに努力することをおざなりにする可能性すらある。

同じように、どのように時間や手間暇をかけて制作した映像作品などであっても、その作品のどこに、今までの作品では伝えられていなかった「新しい」メッセージが盛り込まれているかを、内省して五千字以上のレポートにおいて自分の言葉で述べることができなければ、それは「専題研究」としての作品とは言えないと考えている。将来的に、文芸作品などを提出する学生がいた場合も、同じことがいえるのではないだろうか。

5. おわりに

以上、「新しい」ものを見出すことを「専題研究」の目的と位置づけ、そのために、どの言語を用いるべきか、口頭発表では何を話すべきか、またどのように点数を与えるかという点、またそれに付随して五千字以上のレポートの役割についても述べた。つまりは「新しい」ものを見出し、他者の考えと自己の考えをはっきりと区別したうえで、自己の考えが「新しい」ものであるということを、受け手の判断に委ねず、受け手が理解できるようにプレゼンテーションすること、しようとするのが、筆者の考える「専題研究」の目的と意義である。

「専題研究」は必ずしも一般的に採用されていない台湾の大学教育において、「専題研究」を実施すべきかどうかの分かれ目もここにあると考える。もし多数の学生が「新しい」ものを目指しえない状態であるのならば(学生の成熟度、学生の需要とカリキュラムの合致度など含めて)、「専題研究」の意義は小さい。少なくとも必修という位置づけは検討する余地が出てくる。「新しい」ものを見出すことが難しい状態で実施する「専題研究」は記念品とでも言えようか。記念品に全く意義がないとは思わないが、何かほかに作成の場を設けることも可能であろう。しかし、この節の第一段落で述べた「専題研究」の目的は、大学教育として決して放棄してはいけないことではないか、とも思う。

(きたがわしゅういち 東海大学日本語文化学系)